氏　　名	**瓜　生　濃　世**
学位の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	甲文第81号（文部科学省への報告番号甲第303号）
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位授与年月日	2009年７月15日
学 位 論 文 題 目	**ヴァレリー・ラルボーの作品における自己確立の葛藤とその表現**
論 文 審 査 委 員	（主査）教 授　東　浦　弘　樹
	（副査）教 授　中　谷　拓　士
	教 授　水　野　　尚
	教 授　森　田　雅　也

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20世紀フランスの作家ヴァレリー・ラルボーの小説『幼なごころ』（短編集）、『フェルミナ・マルケス』、『恋人よ、幸せな恋人よ……』、『秘めやかな心の声……』、「テゼの船」（短編）をとりあげ、ラルボーの作品における自己確立の問題を論じたものである。瓜生氏は、一見衒学的で近づきがたいラルボーの作品に、「私」とはなにものかという問題に対する極めて人間的な不安がみられるとして、子どもの心理的葛藤というテーマ、および語りの問題、とくに内的独白の手法に注目し、ラルボーの作品にみられる自己確立の葛藤を分析している。

論文は２部構成で、「子ども、少年少女たちの葛藤」と題された第１部と、「「私」についての記述をめぐって」と題された第２部からなっている。第１部で、瓜生氏は、フランス文学において「子ども」が果たしてきた役割を概観し、大人にとって、子どもは、自らの過去を投影することのできる自己の「分身」であると同時に、自分とは完全に異なる「他者」であると、「子ども」という存在の複雑さ、二重性を指摘した上で、『幼なごころ』で、子どもは大人社会を批判する視点の役割を果たしていると同時に、自己確立のために悩み苦しむ存在として描かれており、その意味では19世紀の文学作品で青年が果たしていた役割を担っていると述べている。そのような子どもの二重性は、大人の捉え方をも変えずにはいない。瓜生氏は、『幼なごころ』にみられる大人の否定的イメージと肯定的イメージを分析した後、この短編集の「包丁」、「ローズ・ルルダン」、「ドリー」、「ひとりぼっちのグエニー」には、主観的な見方と客観的な見方の両方が存在しており、後者が前者を相対化するという構図がみられることを指摘し、『幼なごころ』には、子どもの二重性、大人の二重性に加えて、現実の二重性もみられると述べている。

瓜生氏はさらに、『幼なごころ』にみられる子どもの自己探求の中で、「異国」との出会いと文芸創作活動が重要な役割を果たしていることにも言及し、フロイトの精神分析理論やフィリップ・ルジュンヌの「伝記」の定義を援用しつつ、『幼なごころ』に収められた短編は、ラルボー自身が、かつて自己の不安定さに感じていた苦悩を、様々な語り手を使って再現した「断片的な」自伝であると主張している。

第２部「「私」についての記述をめぐって」では、瓜生氏は、『幼なごころ』に収められた短編「夏休みの宿題」や中編小説『フェルミナ・マルケス』が一人称複数「わたしたち」で書かれていることに注目し、語りの人称の選択が「私」とはなにものかという自己探求の問題と深く関わっていることを指摘する。氏は、『フェルミナ・マルケス』の対話の分析を通して、寄宿学校時代、主要登場人物たちと同級生であった語り手「私」

は、「わたしたち」の名の下に共通の体験を語るが、彼にとってフェルミナとサントスの恋の顛末やフェルミナのその後は知り得ないものであるがゆえに、あるいは子ども時代は「わたしたち」で語り得るが、大人となった現在は「私」でしか語れないがゆえに、語りは最終的に「わたしたち」から「私」へと移行すると述べている。

瓜生氏はさらに、内的独白の手法によって書かれた２編の小説、『恋人よ、幸せな恋人よ……』と『秘めやかな心の声……』を分析し、ラルボーにとって、内的独白は、主人公の青年の自己確立の葛藤を表現するための最良の手段であったことを明らかにしている。瓜生氏は、まず、内的独白の手法の歴史に言及し、エドゥアール・デュジャルダンが『月桂樹は切られて』で使ったこの手法が、ジェームス・ジョイスの『ユリシーズ』によって完成されたこと、それを広くフランスに知らしめたのがラルボーであることを指摘した上で、ジョイスの内的独白は、意識から流れ出る想念をそのまま記述する手法であったが、ラルボーのそれは綿密な構成と詩情をもったものであると述べている。すなわち、ラルボーは、主人公の意識の流れを、一切手を加えずそのまま書いている「ふり」をしているだけなのであり、無秩序を装いながら、芸術作品として読者の鑑賞にたえるものを描こうとしているというのである。

瓜生氏は、最後に、小品集『ローマの旗の下に』に収められた短編「テゼの船」をとりあげ、成功した中年ビジネスマンの手記という形をとったこの作品は、ラルボーが『幼なごころ』、『フェルミナ・マルケス』で描いた子どもや、『恋人よ、幸せな恋人よ……』、『秘めやかな心の声……』で描いた青年のその後の物語であり、完結編であると述べている。この作品の語り手「私」は、仕事においても、家庭においても一定の成功を収め、先行するラルボー作品の子どもや青年が忌み嫌ったブルジョワ社会の現実に安住しているかのように見えるが、それでもなお「私」とはなにものであるかという根源的な問題からは逃げられないのである。

以上の分析を踏まえて、瓜生氏はラルボーの作品における主観性･内面性の優位を指摘し、それをラルボーの「エゴチスム」と結びつけ、「エゴチスム」は「エゴイスム」とは違うこと、「私」の内面をみつめることは自分の殻の中に閉じこもることとは違うことを指摘し、ラルボーの「私」に関する問いは、他者や外的世界とのつながりを求めてやまない精神活動であるとして論文を締めくくっている。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

瓜生氏の論文の口頭試問は、2009年６月29日、文学部新館会議室において、約３時間にわたって公開で行われた。最初に瓜生氏が20分ほど論文のプレゼンテーションを行い、森田・東浦・水野・中谷の順で審査員が講評を述べ、必要に応じて、質疑応答を行った。

20世紀フランスの詩人・小説家、ヴァレリー・ラルボー（1881－1957）は、フランス文学にはめずらしく子どもや子ども時代をとりあげていること、およびジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』をフランス語に翻訳し、「内的独白」の手法をフランスに紹介したことで文学史に足跡を残しているが、日本においての知名度は決して高くはなく、2005年に『幼なごころ』が岩崎力による新訳で出版されたものの、日本で研究されることのきわめて少ない作家である。そのような作家を博士論文にとりあげることは、ある意味では冒険的かもしれないが、たいへん意義のあることと言うべきであろう。

ラルボーの功績を考えれば、瓜生氏が、論文の第１部を子どもの問題にあて、第２部を内的独白の問題にあてたことは、当然であると言うべきであろう。また、ラルボーに関する研究書・論文だけでなく、子どもに関するさまざまな著書、さらには語りの問題に関するさまざまな理論書を読み、必要に応じて引用している点は高く評価したい。とはいえ、第１部と第２部では、分析の対象と方法が異なっていることは、論文としての一貫性を危うくしており、両者を結びつけるはずの「自己確立の葛藤」も十分に定義されていないと

の指摘が審査員からなされた。また、ラルボーを同時代の他の作家と比較するべきではないかという指摘が複数の審査員からなされた。

第１部「子ども、少年少女たちの葛藤」で、短編集『幼なごころ』を分析し、子どもの二重性、大人の二重性を明らかにし、「包丁」「ローズ・ルルダン」、「ドリー」、「ひとりぼっちのグエニー」には、主観的な見方と客観的な見方の両方が存在しており、後者が前者を相対化するという構図がみられると指摘している点は非常に興味深いものがある。それだけに『幼なごころ』の他の短編に対しても同様の分析をすべきではなかったかと思われる。また、第２部「「私」についての記述をめぐって」において、ラルボーにとって、内的独白の手法は、語り手が自身の語る物語の顛末を知らぬまま語っているという点で、日記体小説の延長線上にあったということを、詩から日記体小説を経て内的独白を使った小説へと向かったラルボーの創作・作品の流れと結びつけようとしている点は、極めて野心的であり、中年男性を語り手＝主人公とした短編「テゼの船」が、それ以前のラルボー作品の「完結編」であるという指摘も、独創的であると言えよう。

しかし、その一方で、瓜生氏自身もプレゼンテーションの中で述べていたように、ラルボーの代表作である『A.O. バルナブース全集』が取り上げられていないことは残念であり、今後の問題とすべきであろう。その他、審査員から、引用文の邦訳に既存の訳を用いるべきではないということや、引用文が十分に読み込まれていないこと、「自己確立の葛藤」、「自分とは何かという問題」、「不安」、「孤独」など紋切り型のことばや概念が使われているため、ラルボーの特性が十分に明らかにされたとはいいがたいことなどが指摘された。

それらは瓜生氏の今後の課題であろうが、本論文が博士論文としての条件を満たしていることは間違いなく、審査員４名は、論文の審査ならびに口頭試問の結果から、瓜生濃世氏が本論文によって博士（文学）の学位を受けるに値すると判断したことを、ここに報告するものである。